ツングース語と上代日本語の文法上の類似点

著者	津曲　敏郎
雑誌名	日本語系統論の現在Perspectives on the Origins of the Japanese Language
巻	31
ページ	237-247
発行年	2003-12-26
その他のタイトル	Some Grammatical Similarities between the Tungusic and the Old Japanese Languages
URL	http://doi.org/10.15055/00005281

ツングース語と上代日本語の文法上の類似点

津曲敏郎
北海道大学

キーワード：ツングース語、シク活用、露出形／被覆形、指示転換、係り結び

0．はじめに

0．1 ツングース諸語

ツングース語は十ほどの同系諸言語の総称で、次のように分類される諸言語からなる（池上1989：1063,［ ］は代表的な異称）：

Ⅰ エウェンキー語（中国の鄂温克（エウェンク）語の一部と鄂倫春（オロチョン）語を含む）、エウェン［ラムート］語、ソロン語（中国の鄂温克語）、ネギダル語

Ⅱ ウデヘ語、オロチ語

Ⅲ ナーナイ［ゴリド］語（中国の赫哲（ヘジェ）語［ヘジェン語とも］）、オルチャ［ウリチャ、ウリチ］語、ウイルタ［オロッコ］語

Ⅳ 満洲語（中国の満語と錫伯（シベ）語［シボ語とも］）、†女真語

本稿ではこれらツングース語と上代日本語のあいだに見られる文法上の類似点のうち、系統論および類型論上、興味深いと思われる４つのトピックを取り上げる。はじめの２つは主として形態論にかかわる問題であり、池上（1972, 1978；1980）の研究によるところが大きい。特に第１節は池上の研究の紹介にすぎない。あとの２つはおもに満洲語との統語論上の類型的比較であり、津曲（1982, 2000）で論じた問題の再説である。

0．2 日本語系統論とツングース語

日本語系統論において、ツングース語はしばしば「アルタイ説」の中でも最右翼と目されてきた。村山（1962）は日本語／ツングース語間の音韻比較を試み、形態論的比較として格語尾と数詞の比較を提示したのち、次のように結論している：

「アルタイ諸言語の中で、日本語はツングース語ともっとも密接な関係をもっていると言うことができる。この関係は、朝鮮語に対する日本語の関係よりも密接であると言える。なぜなら、日本語は朝鮮語との間に、格接尾辞においてほとんど共通なものを持たず、また数詞に

おいては、「４」を表わすものにおいて共通である可能性が推定されうるにすぎないのに対し、ツングース語との間にはかなり多くの共通性をもっているからである」（同：169）

次いで、福田（1989）はツングース語との音韻および形態（主に動詞活用形）の比較を行って、積極的に同系関係を主張した。

これに対して池上（1987 など）は系統論には慎重であるが、北方言語（特にツングース語）と日本語の間での言語接触による干渉の探索を重要視し、文法形態素や単語の比較を試みている。さらに早田（1993）は上代日本語の諸特徴について、周辺諸言語（特に満洲語）と類型的観点から比較している。

０．３ 満洲語と他のツングース語

従来ツングース語との比較においては、特に満洲語が取り上げられることが多かったが、これはツングース諸語の中にあって満洲語が 17 世紀以来の豊富な文献資料を有し、最もよく研究されてきたためである（本稿でも満洲語との比較を多く含む）。ただし満洲語がツングース語の中では大きな変化をこうむった、いささか特異な言語であることも承知しておく必要があろう。池上（1979）は次のような満洲語の文法的特異性をあげ、その少なくともいくつかはモンゴル語の影響によるものであろうと見ている：①３人称代名詞語根の相違、②人称語尾および再帰語尾の欠如、③譲渡可能接尾辞の欠如、④属格の存在、⑤指定格「～として」の欠如、⑥与格と場所格の合一、⑦ゼロ語尾命令形、⑧動詞に後置される否定構造。

さらに津曲（1990, 1996, Tsumagari 1997）ではこれを踏まえて、満洲語を含む中国領ツングース諸語の共通特徴として次のような点を指摘し、中国語・モンゴル語および満洲語の重層的な影響関係を仮定した：①名詞・代名詞の属格、②譲渡可能接尾辞の欠如、③指定格の欠如、④形容詞の重複強調形（ｿﾛﾝ nob nogo 「真緑の」、 ｵﾛﾁｮﾝ bag bagdarin「真っ白な」、ﾍｼﾞｪ tab targun「まるまる太った」、 ｼﾍﾞ fak farxun「真っ暗な」等）、⑤一致の欠如。

いずれにせよ、ツングース語と他言語の比較を試みる場合、ツングース語内部の多様性と歴史的変遷を考慮することが不可欠であろう。

１．動詞語尾-si と形容詞シク活用

１．１ ツングース祖語の動詞語尾*-si

池上（1972, 1978）によれば、ツングース語には*-si という動詞語尾があり、ウイルタ語では-si という形で現われる。この語尾は、動詞により不完了連体形・終止形-ra, -ri の異形態として現れるか、またはそれらと区別された意味（下記（1）②の ilisi, təəsi）を表わす。以下はウイルタ語の例：

（1）① andu-si「作る」、panu-si「問う」、ə-si「しない」（否定動詞）
② ilisi「立っている」（cf. illee, illi ‹ili-＋-ra/-ri の融合形「立つ」）、təə-si「すわっている」（cf. təə-rə, təə-ri「すわる」）、miinə-si「くりかえし切っている、切

り続ける」(-nə 反復の接尾辞：cf. mii-rə, mii-ri「切る」)

（2）ŋənəmu-si「行きたい」(ŋənə-「行く」、-mu 願望の接尾辞)、munali-si「惜しむ」、nama-si「あたたかい（と感じる)」(namauli「あたたかい」)、xudə-si「重い（と感じる)」(xudəuli「重い」)、xuturi-si「かゆい」

この語尾の意味について、（1）②では「語幹が意味する運動、状態を継続するか、くりかえすこと」、（2）では「語幹が意味する感情、欲求が存在することをあらわし、また語幹が意味するある感覚を、ものごとの属性としてではなく、また知覚の単なる表象としてでなく知覚作用としてあらわしていたようにおもわれる」(池上 1972 [2001：357]) という。ただし（1）①のように、このような意味だけでは説明しにくい例もあることも認めている (池上 1972 [2001：358])。さらに、この*-si は歴史的には「接尾辞*-s＋動詞語尾*-i、または接尾辞*-s (または*-t) ＋動詞語尾*-si」のように分析され、この接尾辞*-s が上記の意味を表わすとしたうえで (池上 1972 [2001：362], 1978：89)、日本語の形容詞シク活用との比較を示唆している：

「ツングース語と日本語の比較はツングース諸言語間の比較にくらべれば、その確実さははなはだしく減ずるが、日本語の動詞の語尾のなかの r をふくむ要素とシク活用形容詞の語尾のシならびにその両者の関係が、ツングース語の上述の語尾*-ra と*-si (または少なくとも（2）の意味内容の動詞の接尾辞として推定した場合の*-s) およびその両者の関係と対応することがもしもたしかになれば、その比較はツングース語のこの点の解明をたすけるであろうし、またこれら二言語の親族関係に対する一つの強い証左になろう」(池上 1972 [2001：366])

「しかし日本語においてこのシがどんな音にさかのぼるかの問題があり、またシク活用形容詞とツングース語との対応例もまだ見出されていない」(池上 1978：89)

1．2 上代日本語のシク活用形容詞

もちろん上記の比較は、山本 (1955) による、上代日本語のシク活用形容詞に情意的な意味を表わす語が多く、そのシが情意的意味をもつという指摘を踏まえたものである。その骨子を引用しておく：

「ク活用に属する語[以下ではク活]と、シク活用に属する語[シク活]との間には、それらが表わす概念の上で確かに大きな相違がある。即ちク活は「重し」「白し」「高し」「長し」「深し」等の状態的な属性概念を表わす語が大部分であるのに反しシク活は「うれし」「恨めし」「悲し」「楽し」「恋ほし」等の心的な、情意的な面を表わす語が大部分である。相互の例外は無いではないが、きわめて僅少である。…[中略]…この例外は時代がたつとともに増加するが、それは形容詞の意味が次第に転用されて、本来あった活用形と意味との密接な関係が次第に薄くなって行った結果であろうと思われる」(山本 1955：71)

「シク活においてこの「シ」という音節がシク活の情意的な要素を表わしていたのである」(同：75)

2．所有構造と露出形／被覆形

2．1 ツングース語の所有構造

ここでいう「所有構造」とは、従属部名詞（Dependent）と主要部名詞（Head）によって構成される「D の H」にあたる構造である。その関係標示には、類型論的に次の４種の型がある（gen, pers はそれぞれ属格および人称標示、津曲 1992）：

① D　　H　　無標型（標示なし）
② D-gen　H　　属格型（従属部標示）
③ D　　H-pers　人称型（主要部標示）
④ D-gen　H-pers　二重型（二重標示）

ツングース語では２語が一般にこの順で現われるほか、D が人称代名詞の場合、顕在せずに H の人称語尾によってのみマークされることもある。以下、それぞれの型の例：

①ｳｲﾙﾀ語 əəktə puttə「女の子」; 満洲語 haha jui「男の子、息子」、muke ihan「水牛」
②満洲語 yasa-i muke「涙」（＜目の水）、min-i boo「私の家」
③ｳｲﾙﾀ語 əəktə puttə-ni「（その）女の子供」、gasa omo-ni「鳥の巣」、xulda oo-du-ni「箱の隅に」［-du 与格］
④ｳｲﾙﾀ語 (min-i) ŋaala-bi「私の手」; ｿﾛﾝ語 min-ii dil (-wii)「私の頭」

先にふれたように、名詞・代名詞に属格を有しているのは一般に中国領ツングース語に限られているため（上記④のウイルタ語のように、人称代名詞のみ属格をもつケースはあるがその D は随意的である）、名詞と名詞の関係を示すには③の人称型が中心となる。その際、D と H の関係が「譲渡可能」ないし「間接所有」の関係にあると見なされる場合、中国領以外のツングース語では「譲渡可能接尾辞」が人称語尾の前に義務的に現われる：ｳｲﾙﾀ語 (min-i) suŋdatta-*ŋu*-bi「私の魚」、(sin-i) anani-*ŋu*-si「君の年齢」、sura-*ŋu*-bi「私の蚤」（cf. čiktə-bi「私のシラミ」）、mama-*ŋu*-bi「私のばあさん（＝妻）」（cf. asi-bi「私の妻」）。所有構造において、このような文法的区別とそれを表わすための専用の接尾辞があることは、日本語および他のアルタイ諸言語には見られない、ツングース語の特徴といえる（この接尾辞について詳しくは、津曲 1992、風間 2001 参照）。

ちなみに上代日本語の連体助詞ガ／ノの区別について、次のような指摘がある：

「［奈良時代の、人を表わす体言を承ける例について］「ノ」助詞は敬意を表す場合、又はある程度心理的距離感を保つ場合に用いられ、「ガ」助詞は親愛、親近感を表す場合、及びこれより転じて軽侮、嫌悪、憎悪等の感情を含める場合に用いられた」（青木 1952：54）

これは所有関係におけるある種の親近性の違いを表わすものとして、上記のツングース語の区別にも通じるものだが、実は「DH 間の関係」ではなく、「D と話し手の関係」である点が異なる。

2．2 露出形／被覆形の母音交替

日本語には、ツングース語で支配的な主要部標示が見られないが、池上（1980）はいわゆる露出形を被覆形に*-i が付いたものと見る立場に立ち（$sake_2$ < saka*-i「酒」、 ki_2 < ko_2*-i「木」、$kami_2$ < kamu*-i「神」）、その*-i の機能をツングース語等の人称標示と比較している：

「日本語において、名詞と名詞の間の所属などの関係をあらわすのに、上代においては、二つの名詞をならべ、はじめの名詞のあとにノ、ガ（またはナ、ツ、ダ）をおく構造がある。原始日本語には、さらに、名詞二つをならべてあとの名詞に限定をあらわす付属的要素*-i をつける構造（と、おそらくさらに、あとの名詞にその*-i をつける上にまえの名詞のあとにノなどのような付属的要素をおく構造）、すなわち上述の諸言語[トルコ語、ウイルタ語、アイヌ語]にみられる構造に類する所属（ないし限定）構造があったことを仮定したい。なお、その*-i をつけた名詞はまえに名詞をおかなくてもつかわれたであろう。…[中略]…なお、古事記（神武）のクブツツイ、イシツツイのイもあるいはこれであろうか」（同：101）

ちなみに、大野ほか編（1974）ではクブツツイ、イシツツイのイについて、単に「接尾語」と述べるにとどまっている：

クブツツイ：クブはカブ（株）、クビ（首）と同根、ツツはツチ（槌）の古形、イは接尾語。刀の柄頭が槌の形をしている剣
イシツツイ：ツツはツチ（槌）の古形、イは接尾語。石でできた槌形の道具。農具にも武器にも使う

また、亀井ほか編著（1996：1110）では、被覆形に付いて露出形を作ったと考えられる-i を「絶対接尾辞」（特に意味をもたない終端辞：同 835）であろうとしている。

3．接続形式と指示転換

3．1 中古日本語

Akiba（1977）は平安期の資料をもとに、中古日本語の文接続に一種の指示転換（switch reference）の現象が観察されることを指摘した：

少将...おはして、打ちたたきたまふに、人々おどろきて中の君起こしたてまつりて
我が方へ渡しきこゑなどするに、やがて入りたまひて...（堤中納言物語 403）

すなわち、テ形の前後では同主語が維持されるのに対し、～スルニでは主語が転換されている。Akiba によれば、他に～スレバ、～スルヲなども主語転換のマーカーだという。

3．2 満洲語

これを受けて津曲（1982）では、満洲語（文語）のいくつかの接続形式が指示転換の観点から次のように分けられることを述べた：

同主語マーカー：-me「～し（ながら）」、-fi「～して（から）」

異主語マーカー：-ha manggi「～したあと、したら、したので」、-ha de「～したとき、したら」、-ra de「～するとき、するに」、-ra jakade「～するので、すると」、-ci「～すれば、すると」

例（異主語マーカーを斜体で示す）：

[3-1] juwe amban hoton i duka be neifi dahame jifi, han de hengkileme aca-*ha manggi*,
二人の大臣が 城　の門　を 開いて降り　来て、皇帝に叩頭して　会った後、
aisin i hūntahan de arki tebufi omibufi ...（満洲実録 4：123）
（皇帝は）金の杯　に 酒　注ぎ　飲ませて

[3-2] nikan cooha poo miyoocan sindame afa-*ci*, umai tuwarakū dosi-*re jakade*,
明　兵は　砲　銃　放ち 攻めるが、（我軍は）全く見ず進むので、
alime gai-*ci* gabtara saci-*re de* dosirakū ofi, nikan cooha burulaha.（満文老檔　太祖 8/27）
（明兵）受け取るが（我軍）射切るに（明兵）耐えられなくなって、明兵は敗走した。

[3-3] gʻa-gʻa-rin...enenggi mini boode jifi buda jetereo seme solinji-*ha de*, gene-*he manggi*,
ガガーリンが...「今日 私の 家に 来て 飯 食ってくれ」と招き来たので、（私は）行ったところ、
gʻa-gʻa-rin, mini ashaha huwesi be sabufi, emdubei šame sain seme gisure-*hede*,
ガガーリンは私の腰につけた小刀を見て、しきりに眺めて「良い」と言ったので、
bi uthai sufi bu-*re jakade*, gʻa-gʻa-rin mahala sufi hengkilefi gaiha.（異域録 上 80-81）
私がすぐに解いて与えると、ガガーリンは帽子を脱いで低頭して受け取った。

実際には例外もあるが、そのうち「同主語マーカー」のあとで異主語が現れる場合には、異主語が明示されることが多い：

[3-4] liyoodung ni ergici cooha sabumbi seme alanji-fi, han genefi tuwaci…
「遼東の方から兵見える」と告げ来たので、皇帝が行ってみれば（満文老檔　太祖 19/7）

このような指示転換にかかわる区別は、日本語・満洲語双方においていわば潜在的な（covert）範疇と言うべきものであり、これら接続形式の本来的な機能とは言えないかもしれない。いずれにせよ、こうした隠れた範疇における類似は、ただちに系統論に結びつくものではないが、少なくとも類型論的に興味深いものである。

3．3 他のツングース諸語の指示転換

ちなみに他のツングース諸語では、副動詞が「人称語尾をとらないもの」と「人称語尾をとるもの」とに分けられ、一般に前者では主文と同主語の動作、後者では異主語の動作が表わされる。エウェンキー語の例（津曲 1988：886）：

[3-5] si　　unə　əmə-*mii*　nuŋan-maa-n　ičə-čəə　bi-mčəə-s.
　　おまえが早く 来れば　　彼　　を(－3単) 見た　　であろう(－2単)。
[3-6] si　　kniga-wa　əməw-*rəki*-s　　bi　taŋi-mčaa-w.
　　おまえが 本　　を　　持って来れば(－2単) 私が 読んだろう(－1単)。

4．文末条件形と係り結び

4．1「係り結び」と系統論

最後にやはり類型論的に興味深い、統語論上の類似として、「係り結び」をとりあげたい。言うまでもなく「係り結び」とは次のような2種類の非終止形述語構文をさす：

「日本語の古典文法には、「係り結び」とよばれる不思議な統語法があった。先行の語または句に助詞ゾ・ナム・ヤ・カが付くときは、それに続く句の動詞は連体形をとり、助詞コソが付くときは、後続の動詞は已然形をとる、という統語関係で、いずれも後続の動詞は連体形でも已然形でも述語を示し、これらの助詞に先行する部分を強調する：ホトトギス ナキツルカタヲナガムレバ、タダアカツキノツキ**ゾ**ノコレル（連体形）／ヨノスエ**コソ**アハレナレ（已然形）。(『大鏡』第2巻)」(亀井ほか編著 1996：198)

泉井 (1976) は、特異な表現様式の一致こそが、同系言語の模索にとって重要であるとして、「係り結び」を系統論上重視する発言を行っている：

「今も決定的な系統関係がわからない日本語のために同系の言語を模索して「比較」を試みる場合、異例の表現様式、特異な語形のもとに潜む無形なものの一致の解明と発掘が重要ではあるまいか。…[中略]…表現様式については上代以来の「かかり結び」の現象はこうした解明につながる表現の様式の一つであろうか。しかし文構成のタイプにおいて日本語にもっとも近い朝鮮語にこの現象はない」

もちろん、「係り結び」は強調のための倒置ないし省略語法に由来すると考えられており、必ずしも原初的な語法とは言えない。しかしながら泉井の指摘するところは、同系言語であれば似たような語法を発展させる可能性があるということも含めて理解されるべきであろう。

4．2 満洲語の文末条件形

満洲語では、ある語が先行するとそれと呼応して文末に条件形が立ちうるという事実が知られている。これは容易に已然形結びの「係り結び」との類似を思わせる。すなわち、満洲語には条件副動詞-ci「～すれば、すると、しても」があり、仮定／既定、順接／逆接などの接続関係を表わしうる（古典日本語のような未然形／已然形の区別はない。またもっぱら逆接を示す形式-cibe もある)。この-ci は通常文末に立つことはないが、副詞 esi「当然、もちろん」が先行すると文末に立ち、「当然～するとも」のような意味を表わす（津曲 2000；以下の例文出典についても同参照)：

[4-1] bi umai šolo baharakū, šolo bahaci *esi* ji-*ci*.
私は全然ひまがえられない、ひまができれば勿論来る。
[4-2] sini ere gese menen de, tere juwe niyalma *esi* baibi bahafi cihai sebjele-*ci*.
あんたがこんなにまぬけなので、あの二人が当然やたら勝手気侭に楽しんでいられるのさ。
[4-3] boo komso bime ajige de, buya urse *esi* nungneji-*ci*.
部屋が少なくて小さいので、とるにたらぬ連中が当然馬鹿にしに来るのよ。

ただしesiはいつも-ciと呼応するわけではなく、述語になったり、単なる副詞として終止形の前に立つこともある：
[4-4] eiterecibe hūwa-i dolo booi dorgici serguwen *esi*.
概して内庭の中が部屋の中よりも涼しいのは当たり前だ。
[4-5] taidzung han hendume, hecen be afaci *esi* baha-mbi.
太宗皇帝言うには「城を攻めればもちろん得る」。

次例では-ciで必ずしも文が終止していないとも見られる：
[4-6] bi *esi* gene-*ci*, damu tere nimeku ele ujen ojorahū sembi.
私はもちろん行く。（／が、）ただ彼の病気がますます重くなりはしないかと恐れる。
[4-7] genggiyen han hendume, cahar kalka bahaki seme jihe niyalma *esi* gama-*ci*,
英明汗が言うには「チャハル、ハルハは略奪しようとして来た者だから当然奪って行っても、
tere be aiseme hendumbi.
それを何と言おうか」
[4-8] *esi* ji-*ci* jikini.
当然来るなら来るがいい。

ちなみにこの満洲語esiは、ツングース諸語 əsi～əsī 「今」と対応する（Cincius et al. eds. 1977：467-468、さらにRamstedt 1949：66, 231は、このツングース語の単語を ə-「この」si「時」［＜中国語］と分析）。いずれにせよ、先行要素が自立的な語である点、および動詞に已然形と未然形の区別がない点で、日本語のコソ－已然形係り結びとは異なるが、おそらくその由来には、条件節の主節からの遊離・独立といったような共通の発展が仮定できるだろう。

条件形が文末に立つことは、いっぽうで、日本語の接続助詞トモ（本来は引用の格助詞ト＋係助詞モ）が接続助詞から終助詞へと用法変化したことを想起させる。すなわちトモについては「逆接の仮定条件」を表わすほか、「確定的な事柄を、仮定的に表現することによって強調する。…しているが。たとえ…しても。『万葉 1/31』ささなみの志賀の大わだ淀むトモ昔の人にまたも逢はめやも」のような用法があり、さらに「中世以後の口語」では終助詞として「文に相当する語句を受け、言うまでもない、という意で強く肯定する」用法が生じたことが指摘されている（『日本国語大辞典』小学館 1980 縮刷版 8：22）。同書にはまた、終助詞トモの起源について「『源氏：玉鬘』の「あなうれしともうれし」や、『今昔 25/5』の「あな悲しとも悲しや」のような用法から転じたものといわれる」とある。同語反復的用例として上掲[4-8]参照。

参考文献

青木怜子（1952）「奈良時代に於ける連体助詞「ガ」「ノ」の差異について」『国語と国文学』29/7：49-56。

福田昆之（1989）『日本語とツングース語 改版』横浜：FLL。

早田輝洋（1993）「上代日本語のおもかげ：日本語と周辺の言語を比べる」『月刊日本語論』1/2：18-45。

池上二良（1972）「ツングース語祖語の一つの動詞語尾について：*-si に関して」『現代言語学』651-663. 東京：三省堂［再録：池上二良（2001）『ツングース語研究』353-368. 東京：汲古書院］。

――――（1978）「アルタイ語系統論」『岩波講座日本語 12：日本語の系統と歴史』35-98. 東京：岩波書店。

――――（1979）「満洲語とツングース語：その構造上の相違点と蒙古語の影響」『東方学』58：143-153［再録：池上二良（1999）『満洲語研究』344-358. 東京：汲古書院］。

――――（1980）「日本語の名詞語根にあらわれる一種の母音交替の由来について」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』1/3：99-103。

――――（1987）「北方言語と日本語の古層：日本語とツングース語の関係の探索」『月刊言語』別冊 16/7：104-117。

――――（1989）「ツングース諸語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』２：1058-1083. 東京：三省堂。

泉井久之助（1976）「日本語の系統問題について思う：同系言語を模索し比較を試みる場合　異例の表現様式にひそむ無形の一致に注意を」『朝日新聞』1976 年９月４日夕刊。

風間伸次郎（2001）「ツングース諸語における譲渡可能を示す接辞について」津曲敏郎（編）『環北太平洋の言語』７：141-156. 吹田：大阪学院大学情報学部。

亀井　孝・河野六郎・千野栄一（編著）（1996）『言語学大辞典６術語編』東京：三省堂。

村山七郎（1962）「日本語のツングース語的構成要素」『民族学研究』26/3：157-169。

大野　晋・佐竹昭広・前田金五郎（編）（1974）『岩波古語辞典』東京：岩波書店。

津曲敏郎（1982）「満州語文語における主語の維持と転換」『言語研究』81：127-130。

――――（1988）「エウェンキー語」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典』1：884-886. 東京：三省堂。

――――（1990）「ツングース語の類型と相違」小谷凱宣（編）『北方諸文化に関する比較研究』137-147. 名古屋：名古屋大学教養部。

――――（1992）「所有構造と譲渡可能性：ツングース語と近隣の言語」宮岡伯人（編）『北の言語：類型と歴史』261-278. 東京：三省堂。

――――（1996）「中国・ロシアのツングース諸語」『言語研究』110：177-191。

――――（2000）「満洲語動詞語尾-ci の文末用法と-cina について」*Altai Hakpo*（アルタイ学報）10:139-150. ソウル：韓国アルタイ学会。

山本俊英（1955）「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」『国語学』23：71-75。

Akiba, Katsue (1977) Switch reference in Old Japanese. In: *Proceedings of the Third Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 3:610-617.

Cincius, V. I. et al. (eds.) (1977) *Sravnitel'nyj slovar' tunguso-man'čžurskix jazykov* Tom 2. Leningrad: Nauka.

Ramstedt, G. J. (1949) *Studies in Korean etymology*. Helsinki:Suomalais-Ugrilainen Seura.

Tsumagari, Toshiro (1997) Linguistic diversity and national borders of Tungusic. In: Hiroshi Shoji and Juha Janhunen (eds.) *Northern minority languages: problems of survival* (Senri Ethnological Studies no.44),175-186. Suita: National Museum of Ethnology.

Some Grammatical Similarities between the Tungusic and the Old Japanese Languages

TSUMAGARI Toshiro
Hokkaido University

Keywords: Tungusic, verb ending *-si*, possessive structure, switch reference, predicative conditional

This paper reviews four topics on the grammatical similarities between Tungusic and Old Japanese. The comparisons (Tungusic/Japanese) included are: (1) verb ending *-si*/ adjective conjugation in *-siku*, (2) head marking possessive structure/ *rosyutsu-kei* (overt form) reconstructed as *hifuku-kei* (covert form) plus **-i*, (3) switch reference in converbial forms of both languages, and (4) predicative conditional in Manchu/ *kakari-musubi*.

The former two comparisons (1) (2), mostly a brief review of the discussions in Ikegami (1972, 1978 and 1980), are morphological and may have some implications for genetic view. The latter two (3) (4), on the other hand, are syntactic comparisons especially with Manchu discussed in Tsumagari (1982 and 2000) from a rather typological viewpoint.